

## 幼稚園の定員を考える



佐藤 文子

### (1)

幼稚園の一学級三十人ないし四十人は多すぎるということ  
は、よく聞くことです。しかしこうした発言がどのような理  
論的根拠に基づいてなされているのかということになると、  
いずれも非常にあいまいです。一学級四十人の場合、どうい  
う問題が生じるのか、それは学級の人数を減らせば確実に解  
決するのか、何人ならばそのような問題は生じないのか……  
等について実証的研究をふまえての主張は殆どないよう  
です。多くは漠然と一学級の人数が多すぎる、少なくともすれば思

い通りの教育効果が期待できると主張しているよう  
に思われます。

私自身も不勉強のため、一学級何人でなければならぬか  
について、はっきりした人数をあげるだけの理論的実証的根  
拠をもっておりません。それにもかかわらず、このテーマに  
ついて発言しようとするのは、幼児教育に関係する以上、ど  
のような視点からこの問題を解決したらよいかを明らかにし  
てみる必要があると考えるからです。

先ず、幼稚園そしてそこでの学級をどう考えるかが問題に  
なるでしょう。幼児教育は近代社会の要求であり、幼稚園の

同年齡児學級は歴史的必然であると考えると考えるところから出發したいと思ひます。この点についてはまた後にふれることにします。

## (2)

次に、幼稚園が子どもの發達にどのような意味をもつかを知るために、子どもの生活における人間關係の發展を考へてみたいと思ひます。

ヒトは非常に無力な状態で生れ、出生と同時に人間關係に入ります。親に依存することによって、子どもは生命を維持することができると同時に、社会的・文化的生活に参加します。すなわち親子關係を通して生命維持の行為すらも文化的行為となるわけです。このようにして、安定した親子關係を媒介として、子どもは社会的行動を学習していく。ここに人間の子どもの發達の基礎があります。

しかし親—子關係は宿命的な—子どもにとって選択の余地のない—特定の關係であるだけでなく、一般的性質として、縦の關係であり、依存的關係です。ここに止まっている限り、子どもは次の段階の發達へと進めません。子ども同士の横の關係が展開することによって、垂直な權威依存的關係

から子どもは徐々に脱却することができるようになります。

子どもの生活の展開という点からいへば、子ども同士の關係の最初にくるのはきょうだい關係、そして近隣の子どもの同士の關係です。

きょうだいは、血縁による關係であり、生活の根柢を同じくするのが普通です。そこで互いの欲求や利害のぶつかり合ひを経験し、けんかが生じ、その解決を通して順番や交替にすること、ゆずり合うことを学び、思いやりの心も育ってきます。

しかしきょうだい關係は子ども同士の關係ですが、長幼の序のはっきりした關係です。ここでは、社会・文化による差はあつても、出生順位や男女による親の役割期待がかなり明確であり、子どもは親の期待にそつた行為をすることが比較的容易です。

近隣の子ども集團は、きょうだい間におけるような出生順位による役割期待を離れて、子どもが自由に役割をとり得る集團です。しかしまた、家が近いという限定の上に、各自の年齢や能力等により役割が固定したり、力關係によって支配される集團にもなり得るものです。

このようにきょうだい關係や近隣の子ども集團は、社会的

行動や社会的態度の学習にとって重要なものです。しかしこれもまた、限定された関係です。子どもの人間関係はこれをこえて次には対等の横の関係へと発展していきます。

(3)

このように人間関係の発展の中で子どもは社会化されていきますが、それはまた同時に自律の過程でもあります。そして社会化、あるいは自律は狭い意味の社会性や人格の発達にのみかかわるものではなく、子どもの精神発達全体にかかわるものです。

私たちは便宜的に、子どもの発達を、知的、運動的、人格的、情緒的、社会性……等といくつかの側面に分けて考えます。しかしこれはあくまでも便宜的であって、子どもの発達は全体的、総合的になされるものです。

初期の親子関係における基本的信頼感が子どもの安定した人格発達の基礎になることはよく知られています。親子関係はまた同時に子どもの初期の社会化を方向づけますし、子どもが感覚・運動的活動を通して世界を知っていく、すなわち、知的発達の基盤ともなります。

子どもはぎょうだい関係や近隣の子ども同士の関係の中

で、次第に思いやりや相手の立場に立って考える態度を学習することを先に述べましたが、このような態度は単に社会性の一側面としてとらえられるべきではなく、それは論理的思考ができる基本的条件です。

幼児期の知能の発達は活動を通して環境と適応的關係をもつことによってなされます。ピアジェは知能の発達を知能の社会化と考え、特に子ども同士の対等な人間関係が知能の発達にとって重要であることを主張しています。対等な知的対話によって子どもの論理的思考は発達するというのです。垂直的、依存的關係の中では真の意味の対等な知的価値の交換はできません。子どもが他の子どもと接触しながら、対等な關係の中で自他の行為の意味を知り、関連づけることにより、子どもの世界に対する自己中心的態度は次第に後退し、観点を變えて考えることができるという論理的態度が発達してきます。子ども同士の間で真にコミュニケーションの手段として機能することばは、次第に内化し、思考の道具として機能するようになります。

以上のことから知られるように、社会性や人格の発達は人間關係の中で、知的発達は知識の習得によって……と各側面がバラバラに発達するのではなく、人間關係の発展に伴っ

て、子どもの発達の全体的水準が高次の段階へと進んでいきます。そして子ども同士の横の人間関係の中で自律的判断によって行爲することが可能となる時、子どもは親子の依存的関係を脱却することができるようになります。もし横の関係の中で自律性を獲得できない場合には、子どもは大人との依存的関係にとどまることになるでしょう。

(4)

幼稚園は子ども同士の対等な横の関係が展開する場です。

私は幼稚園における同年齡児の学級を歴史的必然と受けとめるところから出発しました。幼稚園に通うこと、そしてそこで同年齡児が学級集団をつくることを便宜的なものと考え人もいます。しかし私たちは、血縁、地縁による集団が個人の生活にとって、したがって子どもの発達にとって、決定的な意味をもった時代に生活してはおりません。幼児教育のはじまりは託児所的なものであったかもしれませんが。しかしその歴史的展開を近代社会の発展と無関係に考えることはできません。近代産業社会は学校教育を年齢の上と下へ拡大してきました。近代の産業化がもたらした子どもの生活環境の変化、また教育のシステムについて否定的な態度をとる人が多

いようです。確かに今の社会がもつ子どもを発達させるしくみが、子どもの発達にとって最適のものであるという保証はありません。しかし歴史を逆流させることはできません。社会は歴史的により複雑な段階へと進みます。複雑に発展した社会においては、その成員もまたその水準に発達することを要求されます。今、この社会にある子どもを発達させる教育のしくみを歴史・社会の必然的要求として受けとめて、未来にむかってよりよく発展させていくことが、私たちの課題と考えます。

先に、発達理論から子ども同士の対等な横の関係が子どもの発達にとって重要であることを述べました。そして幼稚園における同年齡児の学級を歴史的必然として受けとめるならば、この同年齡児の集団を、子どもが依存的段階から自律的段階へと発達することを可能とする対等な横の関係へと組織することが、幼稚園教育の課題となります。

親子の間の信頼関係が子どもの安定した発達の基盤になることを先に述べました。子ども同士の関係についても同様です。子どもが人間関係の中で自他の行爲の意味を知り、自律的判断に基づいて適応的行動ができるためには、人間関係自体が構造化され、秩序をもっていなければなりません。もし

人間関係に子どもが経験を照合させるための形や構造がない場合には、子どもの構造化された発達は望めません。

幼稚園は意図的な教育の場です。しかし子どもたちは教育を受ける、学ぶという意識をもって幼稚園に入園してくるのではなく、また子どもたちの意志で学級に分けられるのでもありません。入園当初の子どもたちは共通の目的意識もなく、また集団の成員としての自覚もありません。このような子どもたちの集りには集団としての構造もなく、秩序もありません。教師の方向づけと指導によって子どもの集団ははじめて構造化されます。

ここで幼稚園の教師の役割について少し考えてみたいと思います。文化伝達は教育の重要な部分です。幼稚園の教師も当然ながらこの機能を果たさなければなりません。しかし文化遺産の伝達が単に知識として、技能としてバラバラになされるならば、子どもの構造化された発達に役立たないことはすでに述べたことから知られます。文化遺産は子どもの社会において活かされ、発展させられなければ真に文化としての意味をもたないでしょう。このことは文化を共有しうる子どもの集団が形成されなければならないことを意味しますが、一方子ども集団の発展は、価値、規範、文化を共有すること

によってなされます。文化伝達機能と子どもの集団の組織化という機能を統合させながら、子どもの集団を方向づけ、構造化していくことが、教師の主要な役割と考えます。

## (5)

次に学級における子どもの集団の形成について考えてみます。学級は二次的結合によるフォーマルな集団です。しかし幼稚園の学級集団は他のフォーマルな集団のように明確な客観的組織や特定の慣習的手続きの体系をもちません。一次的接触によってではなく集められた子どもたちが、接触の頻度を増しながらインフォーマルな遊びの集団を形成していく過程で、集団の発展と維持のために必要な慣習的手続きをつくっていくところに幼稚園の学級集団の特徴があるといえます。換言すれば、子どもがインフォーマルな遊びを展開する中で、フォーマルなリーダーである教師の指導のもとに、フォーマルな人間関係を学習するということです。それは今遊びを発展させる上で必要なことであり、将来の生活に役立つからではないのです。

子どもは遊びにおいてインフォーマルなグループを形成します。子どもの遊びの発達を人間関係の発展からとらえよう

とする研究がありますが、そのような研究によりますと、幼児期には「平行遊び」から「連合遊び」が多く、遊ぶ人数も2〜3人から5〜6人位と言われています。

またソシオメトリー等で子どもたちが友だちを選択する理由を調べてみますと、接触の初期、そして年齢の低い段階では、「家が近いから」とか「席が近い」といった物理的接近に伴う親近感によって、あるいは「何となく好き」といった有機的感情によって結ばれることが多く、集団過程がすすむにつれ、また年齢の上昇に伴って、好みの一致や相手の人格、能力に対する尊敬、また同情等から結ばれるようになります。

しかしこうした研究は、多かれ少かれ大人の指導の下にある集団を対象としていることを頭においてみなければなりません。

幼稚園の子ども集団についての私自身のこれ迄の研究から次のようなことが知られています。学級集団に方向性がなく、構造が不明確な場合、子どもは物理的接近や好きという漠然とした有機的感情を土台に結びついた仲よしグループを形成します。このようなインフォーマルグループは固定化し、孤立しがちであり、それぞれのグループの中でも役割が

固定する傾向がみられます。

一方学級集団に方向性があり、集団の規範や文化が明白な場合には、子どもは「仲よしグループ」をこえて、遊びによって参加するメンバーは異なりますし、またそれぞれの子どもとる役割も遊びに応じて変化します。

前者では、それぞれの下位グループは基礎集団——学級集団に共通の価値、規範、文化によって媒介されておらず、したがってグループ同士が有機的に結ばれていないため、それぞれのグループでの経験は、孤立した閉鎖的なものとなります。後者には、下位グループが共通の価値、規範、文化によって媒介されており、人間関係における形がはっきりしているため、それぞれのグループでの経験が基礎集団にフィードバックされ、下位集団での学習が基礎集団全体の発達水準を上げ、また基礎集団の水準の向上は下位集団における学習を促進することになります。

このように学級集団のあり様は、単に交友関係の相違ということをこえて、子どもも全体的な発達にかかわることになります。同年齢児が集まれば必ずと同等な横の関係がもてるわけではありません。幼稚園においても適切な指導がなければ、ボスの支配する近隣の子ども集団と変りがなくなりま

す。この時には、先に述べたような対等な関係の中での発達  
は望めなくなりませう。今、子ども同士の遊びを進展させるこ  
とが、子どもを発達させることになります。

(6)

人間は社会的存在であり、個人の存在は社会的関係ときり  
はなしては考えられません。ところで社会は数多くの個人に  
よって構成されていますが、現実には私たちが少数の個人を知  
っているにすぎません。私たちはこのように現実に具体的な  
個人と結びついて、はじめて全体社会に属することができま  
す。そして具体的な人間関係を通して、社会における個人の  
あり方、個人の存在の意味を知ります。

同様に、子どもは特定の個人との結びつきなしに、社会的  
関係を学習できないのですが、特定の個人との関係を特定の  
関係に終らせてはならないことがわかります。それはいつも  
より広い人間関係へと開かれていなければなりません。

このために、学級はインフォーマルな子ども同士の関係を  
さらに広い社会へと媒介するフォーマルな基礎集団として機  
能しなければならぬと考えます。

子どもがインフォーマルなグループにおける特定の結合を

こえて社会的関係を学習しうるためには、いくつかのインフ  
ォーマルグループが有機的に結合しうる、そしてグループが  
流動しうる集団のサイズが必要と考えられます。また集団の  
規範、人間関係のルールを、教師の媒介によって、子ども同  
士がつくり出していけるためには、集団のサイズに一定の範  
囲があるのでないでしょうか。さらに、これらのことと関  
連するでしょうが、子どもが集団所属の意識、「我々意識」  
をもちうる範囲があると考えられます。

これらの点に関して、私は今、明確な答はもちませんが、  
今後できるだけ実証的に検討していきたいと考えておりま  
す。

子ども一人一人に教師の目がとどくということは教育にと  
って欠かせないことです。しかし教師が責任をもつ子どもの  
人数が少なくなれば、それだけ一人一人がよくみえるようにな  
るとは限りません。むしろみる観点がはっきりしているか  
どうかの方が問題と考えます。歴史社会の発展の必然性を受  
けとめながら、未来の社会に生きる子どもを発達させる方法  
を前向きに考えたいと思います。

(秋田大学)